

ヘーゲル『精神の現象学』

(使用テキスト：金子武蔵訳、岩波書店)

絶対的な知ること Das absolute Wissen

[一 絶対的な知ることの成立]

1 / 啓示宗教の精神から絶対精神へ

シェーマ 1

・啓示宗教の精神

この精神のうちで相互に区別しあう諸契機は何れも表象することに属し、対象性の形式に属している。

・絶対精神

表象することの内容→対象性という単なる形式を止揚することへと向かう。

ここでは、先ず、啓示宗教の精神から絶対精神への移行がどのような意義を有しているかが、とりあえず上に示した図式のもとで述べられる。それは、極度に単純化し
て言えば、意識が対象を克服する過程である訳だが、それは単に、対象が自己のうち
へと還帰するというような一面的なものではない、とヘーゲルは説く。それを自己意
識の運動の局面に限ってみるならば、一方で否定的な意義しかもたないようにみえる
運動が、同時に、即自的な範囲にとどまらず、肯定的な意義をもつことが示される。
それを、ヘーゲルは「対象が、自分自身を止揚する」局面、「自己意識が対象の無な
しさを知る」局面と呼び、それが何故言えるのかを、次の二つの側面からであると述
べている。

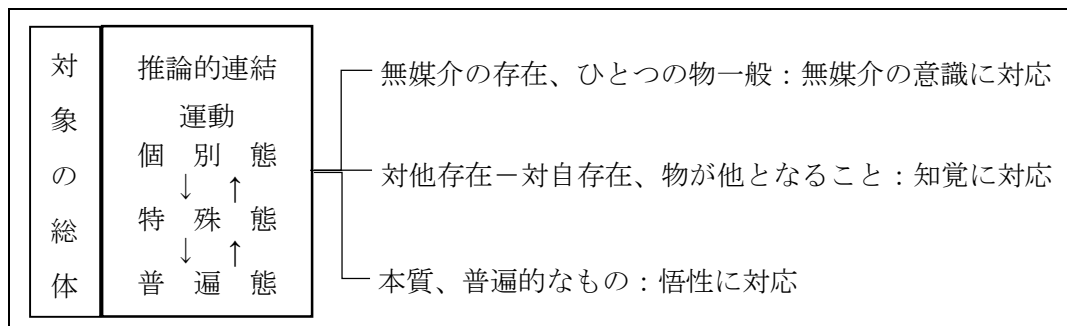
++ 一方から言うと、自己意識が自分自身を外化することによりはするが、・・・と
言うのは、かく外化することにおいて自己意識が自分を対象として定立するからで
あり、言いかえると、自己意識が対自存在としての不可分の統一の故をもって、対
象をも自分自身として定立するからである・・・しかしながら他方から言うと、自

己意識がかかる定立を行うことのうちには、自己意識が右のごとき外化及び対象性を同時に止揚してしまい、また自分のうちへ還帰してしまいもし、したがって自分の他的存在そのもののうちにおいても自分のもとに存在するというもうひとつ別の契機も含まれているからである。(絶対的な知ること 原書 No. 549)

〔α 「意識」とその対象との諸契機〕

2／対象の三規定と意識の諸形態化の形式：意識への対象の現れ

シェーマ 2



絶対精神への移行は、意識が対象を克服する過程として捉えられるのだが、それは、前段の末尾で述べられているように、意識のその運動のうちにおいて、意識が対象に関係し、対象に対応してとる態度は、対象の諸規定の総体に従ったものでなければならない。そして、意識が対象の個々の規定を各々自己として把握するこのような態度が、精神的な態度と呼ばれていた。

そこで、対象がどのような諸規定を経廻ってその総体を構成してきたかが、ここで再度反芻される訳である。

これに対するに、意識が対象を自分自身として知することは、上記の三規定に即したものでなければならないことになるが、しかし此处（精神の現象学において、但し前章までの：金子註）で指摘しているのは、それをただ生成の過程においてのみみるべきであり、純粋な知ることの諸契機（普遍・特殊・個別：金子註）は、意識の諸形態化の形式において指摘されるべきである、という。

〔β 三つの頂点〕

3／意識の対象を受け取る側面～無媒介の意識の場合

対象が、意識にとってひとつの没交渉な存在である限り、「我々」が既にみてきた過程においては、「観察する理性」がその没交渉な物のうちに、自分自身を探究し見出していたことが挙げられる。その際、この理性が、対象をただ一つの無媒介のものとして意識している時には同時に、自分自身の成すこともひとつの外面的なものとして意識されており、その理性の頂点（頭蓋論：金子註）において自らに与える規定は、「自我の存在はひとつの物である」という無限判断においてのことであり、この時その「物」はひとつの感覚的な無媒介の物である。

++ ところで〔頭蓋論〕のかかる「表象」の概念は、理性とは己をもってあらゆる物たることであるとするものであり、しかも純粹に対象的な物たることでさえあるとするものだということであるが、しかし理性がかかるものであるのは概念においてのことであり、言いかえると、概念こそ理性の真実態にほかならないのである。このさい、もしも概念の内容が概念としてあるのではなく、「表象」としてある場合には、概念自身が純粹であればあるほど、それだけ概念は馬鹿げた表象に墮落する、・・・即ちもし己自身を止揚する判断がその「無限性」の意識を伴って受け取られずに、かえって持続的な命題として受け取られて、この命題の主語と述語とが各自別々に妥当し、自己は自己として、物は物として固定せられ、それでいて一が他であるべきはずだと考えられる場合には、概念は馬鹿げた表象に墮落するのである。（理性－観察する理性－自己意識が自分の直接的な現実に対してもつ関係の観察、人相術と頭蓋論〔観察する理性の結論〕原書 No. 254）

4／意識の対象を受け取る側面～． 対自的に存在する物の場合

前段の「自我の存在はひとつの物である」という言明、「物は自我である」であるという局面を良く考えてみると、この無限判断において、物としての物は全て止揚されてしまっており、そこから、物がそれ自体としての意義を見出すためには、他の物との関連を導出しなければならない。そこに結果として、意識に「関連」という契機が生じてくる。

これがみられ、自覚されることになったのは、純粹透見と啓蒙の場面においてのことであり、そこでの物は、常に何事かに役立つ有用なものであった。その際自己意識は、自分から疎遠になった精神の世界（国権と財富）を遍歴し終えて形成された教養を得ており、物が本質的には対他存在であるにすぎぬことを知っている。

5／意識の対象を受け取る側面～道徳的な自己意識の場合

物を知悉することは、物の有用性、或いはその関連を知ることでは未だその完成態へは至らない。それは次に存在の本質ないし内なるもの、更には自己としても知らなければならないが、（ここで自己を知るとは、物＝自我の無媒介な知ではなく、全的に知ることが含意されている：金子註）そのような自己が完成態として現れてきたのは、道徳的な自己意識においてのことであった。

この自己意識は、自分の知ることが絶対的な本質態であること、存在が端的に純粹な知ること、純粹な意志すること、であることを知っている。又、「そこ」の存在（定在）との関係においては、ずらかしとしての「世界表象」においては、定在を自己から解き放ちあはするが、最後に全的に知ることになったときには、その定在そのものが、自分自身についての上記のような知の確信（信念）であることを知っている。そこでの意識は行動的であり、自己が自分について純粹に知ることにより着くのである。

6／精神と意識一般との和らぎ

意識が、対象をどのように受け取るかという側面から、三つの契機が想起された訳だが、精神はそれの統一体としてのみ現れ出てくる。しかし、統一体といいながら、これらの契機が徐々に進展する過程を構成するものであるから、そのうちで最後の段階のものが、必然的にその統一自身であり、これらの契機のすべてを自分のうちに結合していることになる。

その最後の契機において、定在のうちにおいても自分自身を全的に知り、確信を得ている精神は、自らの定在はその自分についての知のうちにすべて含まれていると考えているため、自分の行為は、義務についての信念に従っているのだ、と言明する。

++ したがって「自分がかく行動するのは、全的に知ることからすることである」と言う人は誰でも真実に語っているのである。なぜなら、その人の全的に知ることが

その人の知り且つ意志する自己だからである。しかしながら、彼はどうしてもこのことを言じなくてはならない。なぜなら、このさいの自己は同時に普遍的な自己たらざるをえないかえらである。しかし自己が普遍的であるのは、行動の内容においてのことではない。なぜなら、内容というものはその限定性の故をもってそもそも自体的にどうしてもよいものだからである。(精神—全的に知ること—〔断言の言葉〕原書 No. 460)

シェーマ 3

行動の三運動

- i. 概念の単一態からの分離と還帰
- ii. 承認することの場面が、義務についての単一な知ることである行動の内部にある区別に働きかけ、それを対抗関係として際立たせ、抗いがたい「現実」を形成する
- iii. 赦しにおける頑なさの融解、それ自身による自己放棄、外化

このように、今度は行動の側面から前述の諸契機が捉えかえされるのだが、そこに明らかになってくるのは、精神と意識一般との和らぎが、普遍態或いは本質という最後の契機としてもたらされ、個別的な自己と普遍的な自己のいずれにも妥当するもの、ただ知ることとしてだけであるということである。ここで、個別的な自己が、純粋な知を介して、普遍的な自我へと至るのである。

〔γ 全的に知ることにおける和らぎと啓示宗教における和らぎとの統一性〕

7／意識と自己意識の二重の和らぎ

こうして、宗教を除いた精神にも、その最後の契機である全的に知ることにおいて和らぎが訪れることが判った。そこで、意識と自己意識との和らぎ・・・意識が対象を受け取る諸契機の総体と純粋な知ることとの和らぎ・・・が二重の側面から成就されていることが示される。

このうち第一のものは宗教的精神＝即自存在の形式（キリストの贖い死：金子註）であり、第二のものは意識としての意識自身＝対自存在の形式である。この両者は、今までそれぞれ別々に考察されてきた訳だが、意識の諸形態が「我々」に現れてきた

順序（意識－自己意識－理性－精神）においては、それは一方でその継起する序列に従った意識の諸形態（「個別化した諸規定」：金子註）へ到達し、他方ではその諸形態の統一づけ・普遍態（「諸契機の単一な総体」：金子註）へと到達している。そして、ヘーゲルはこの精神の諸形態化の全プロセスを完結させるものこそ、この諸形態の統一づけであることを予告する。そこで初めて精神は、即且つ対自的に自分が何であるかを知ることになるという。

8／宗教における和らぎの統一づけ

意識と自己意識との和らぎの統一づけは、即自的には出来しているのであり、それは特に宗教においてそうである。それは表象から自己意識への還帰としてしるしづけられているが、しかし、それは宗教に固有の即自的な面からして、この統一づけが孕んでいる自己意識への還帰とは相入れない反対の局面を含んでいる。そこで、宗教においては、自己意識的な精神は、その統一づけだけを欠きながら、その内容としては完全に出来上がっており、又、欠けたる統一づけも、概念の単純な統一態（「理性の概念」：金子註）であり、自己意識の面では、その「概念」すら具備している。この概念も、精神の序列のなかでは他の諸契機と同様に、意識の特殊な形態をとっている。それが「美しい魂」と呼ばれた部分である。

++ そこでこの自己の為すこととはと言えば、憧憬である。即ち自分自身で対象と成りはしても、この対象は実のないものであるために、ただ自分を喪失することであり、さればと言って、この喪失を越え、その外に出て自分に帰ってきても、見出されるのは、ただ自分の喪失だけであるという憧憬であり、・・・自分の諸契機のこのような透明清澄な純潔さのうちにおいて、所謂美しい魂と呼ばれるひとつの不幸な魂の光輝は内面において次第に消え失せて行き、そうしてこの魂は空中に失せる形のさだかでない霧のようになって消え去るのである。（精神－全的に知ること－「美しい魂」－「憧憬」原書 No. 463）

「美しい魂」においては、純粋な「自分のうちに存在すること」を純粋に知ることになるのが精神である、ということを知っているところの自己意識が成立しており、それは神的なものを自己として直観すること（教団の神奉仕）として形象化した訳である。そして、そのことがどのような帰結に至るかが上記に引用した部分に見られ

る。しかし、それはこの概念が自己実現に反対し、固定化するときに陥る事態であり、自らを積極的に外化し、放棄し、先へと進んでいくときには、自己意識の頑なな「我執」－「概念の限定態」は自己＝対象を止揚するのである。

9／宗教における和らぎの統一づけ ・

理性段階においては、この概念（理性の概念：金子註）が自分に中身を与え充実を得たのはその最終局面の「全的に知って自分自身を確信している精神」のうちにおいてであることが再確認された訳だが、ここでは宗教におけるそれと対比される。即ち、宗教では、啓示宗教の段階において、概念は絶対的な内容を内容として、表象－意識に対する他的存在の形式において獲得したということである。これに対して、全的に知ることにおいては、形式が自己自身であり、行動する「全的に知って自分自身を確信している精神」を含み、そこにおいて自己が絶対精神の生命を段階を踏みながら実現していくことになる。

この全的に知る形態は、「単一な概念」でありながら、自分の永遠の本質を放棄し、定在し、行動する。又、行動することは二つに分裂し現れ出てくることであるから、この形態は概念の純粹態であり、絶対の抽象、否定態である。同時に、この形態においては、概念は自分の現実態を、自分の純粹な知ること自身として自ら具えている。そして最後に、定在は純粹に知ることから抜け出し、自分のうちへ反省し還歸して存在することになる。

こうして、宗教段階においては即自的に定立されている和らぎが、全的に知ることという理性の最終段階においては、意識がこれについて知ることとして、又、意識的に為すこととして繰り返されることになる。ここでなされる放棄は、既に概念の自発的放棄であり、当の即自的なものは今や真実態におけるかのごとく自分を定立し、対立していた意識も、いずれも限定態として自体的に自分自身を止揚することになる。

++ そこで行動することというのは、以上のような運動のことであるわけであるが、この運動を介して、精神・・・いったい精神が精神であるのは、「そこ」に存在することによって、また自分の「そこ」の存在を思想のうちへと高めることによって、こうして絶対の対立のうちへと高めることによって、さらにはこの対立から、この対立を介して、この対立自身のうちにおいて〔自分のうちへと〕還歸することによって初めて成り立つことである・・・は自己意識でもあるところの知ることの

純粋な普遍態として、また知ることの単一な統一でもあるところの自己意識として現れ出てきているのである。(絶対的な知ること 原書 No. 555)

10／宗教における和らぎの統一づけ

かくして、精神が精神として顕現するありようが、自己意識として現出する訳である。そこでは、宗教においては内容－他者を表象することという形式－であったものが、自己にとって自分自身の為すところとなる。この両者を結合するものこそが概念であり、それは、自己が自分の為すことを知っていることをして、あらゆる本質態と定在とを知ることであり、「この」主体について知ることをして、実体について知ることであり、同時に、「この」主体の為すことについて知るものである。

この際、「我々」がその見地から付加したものは、・個々の契機の集積であり、・概念をその形式において確保することであった、という。

〔二 絶対的な知ることの本性と史的前提〕

11／精神の最終形態・・絶対的な知ること

前段までの反省により、精神が精神としての自己を余すところなく実現する形態が、宗教段階の最終局面で自己意識として現出した訳である。この形態は、自己の完全で真実な内容（「精神の生命」）に自己という形式（「概念」）を与え、自分の概念を実現する。又、それと同時に、自分の概念の実現を生きながら、そのうちにおいて自分の概念のうちにとどまる。そして、このような精神の最終形態をヘーゲルは「絶対的な知ること」と呼ぶ。

そして、この精神の最終局面、絶対的な知ることのパラフレーズとして次のようなことが言われる。

++ 絶対的に知ることとは自分を精神の形態において知るところの精神であり、言い換えると、概念的に把握するところの知ることである。(絶対的な知ること 原書 No. 556)

これは、既に前段迄で言われていることの反復に過ぎないが、ここではほぼその最終的な形態についての言明が成されているとも捉えられよう。ここでは、宗教における

「真理」と「確信」の同一と、絶対的な知ることにおけるそれとの相違という点から、それが強調されている。即ち、宗教における真理と確信との同一は未だ即自的なものであり、真理は確信との完全な同一ではなく、その内容を成している。ところが、絶対的な知ることにおいては、真理は自分自身であるという確信の形態を具えており、「そこ」の存在においても、知るところの精神に対しても自分自身を知るという形式においてある、という。そしてここに「概念」が生起するという訳である。

++ かく本質でありつつ「そこ」の存在でもあるところの当のものが即ち概念でなのである。この概念という場面のうちにおいて「意識」にとって減少しているときの精神、或いはここでは同じことではあるが、言い換えると、この場面のうちにおいて「意識」によって創り出されたときの精神、これが学である。(Ibid. 原書 No. 556)

こうして以後、全ては概念という場面のうちで語られ、絶対的な知ることという形態において、すべてが同一「である」という媒辞で結ばれていくであろう。

〔α 個別的自我と普遍的自我 対象意識と自己意識〕

12／絶対的な知ることの本性

シェーマ 4

- | |
|--|
| <p>i. 自己意識の純粋な対自存在：自我～「この」自我であって他のいかなる自我でもなく、又媒介され、止揚された、普遍的な自我。</p> <p>ii. 純粋な否定性：意識：内容の保持と区別</p> |
|--|

上記はいずれも絶対的な知ることの本性として言われていることである。こうした理解が、些か退屈なものになることをヘーゲルが承知していたかどうかは知らないが、これらはいずれも、既出の事々の反復であり、その平板な見取図になっていることは否みがたいようである。

それはともかく、ここでは、既に絶対性に辿り着いてしまった精神が、絶対的な知ることとして、それ自身を導くことになった諸契機との間にどのような運動を行うの

かが記されている。そして、この運動から、精神の「遍歴する」という属性が導き出され、又その遍歴が、精神がその対象性においても概念の形態を具えていることと結び付けられる。

〔β 時〕

13／諸契機に区別された絶対精神

前段において、対象性における概念の形態が示された訳だが、その対象性ということから、概念の「そこ」の存在が見直される。すると、時と現実のなかに学が現象してくるのは、押しなべて精神が自分についての意識として、絶対的な知を得、自分の不完全な諸形態を克服し、そうして、自分の自己意識を自分の意識一般と同一化し一致させるという労苦を全うした後のことであるのが判る、という。

14／諸契機の先在性、概念としての時

それを現実のうちにおいてみるならば、知るところの実体（諸契機）の方が、この実体をとる形式（概念の形態）よりも先に「そこ」に存在することになる。この際実体というのは、未だ展開されていない即自的なもの、概念ではあっても未だ運動にはもたらされていない単一態におけるもの、即ち、前に置き表象するところの「意識一般」の対象としてのことだが、ここで概念の認識は、再認「改めて認識すること」、精神的に意識することとして措定され、そこでは実体のもつ諸本質態が自己意識へと吸収され、かつ同時にそれを自分から生み出し、再興することを成し遂げる。

++ 以上のごとき次第であるから、自分が概念であることを知っている概念においては、諸契機のほうが充実された全体よりも先に登場してくるのであり、そうしてこの全体の生成することがかの諸契機間の運動であるということになるが、これに対して「意識」においては全体、ただしまだ概念的に把握せられていない全体のほうが諸契機よりも先である。（Ibid. 原書 No. 558）

こうして、諸契機の先在性が、認識に対する対象の現れにおいて確認される。又、意識においては、その順序が転倒して成立するという訳である。そして、この順序への言及から、これらの事象の生起する基盤としての「時」が問題にされる。

++ 時間とは「そこ」に存在する概念そのものである。しかし、量という没概念的な区別の原理と相等性という抽象的で生命のない統一の原理とは、時間という、生命のかの純粋な不安定と絶対的な区別とを相手とすることはできない。したがって、この否定性はただ麻痺されてしまうだけであり、即ち麻痺されて一として数学というこの認識の第二の素材となるだけであるが、この認識は外面的な働きであるから、自己自身で運動するものを「素材」にまでおとし、この素材において今や互いに没交渉で外面的な、生命のない内容をうるのである。(序文ー〔三 哲学的真理〕ー〔二 歴史的真理と数学的真理〕原書 No. 39)

ヘーゲルによれば、時とは、「そこ」に存在するところの概念そのものであり、空なる直観として意識に対して自分を前に置き表象させるものである。従って必然的に自分の純粋な概念を十全には把握していない精神は、この時のうちに現象する。即ち、時は概念ではあっても、ただ直観されただけの概念であり、概念がその境地を抜け出し、自己自身を把握するには、自分の時の形式を止揚し、直観することを概念的に把握しかつ把握され、又、その把握を直観することとなる。つまり、時は未だ完成し終えていない精神の必然性(さだめ)として現象してくるのである。

〔γ 経験〕

15/経験と精神の全体性

精神にとって、時が必然性として立ち現れてくるのであるから、経験のうちにあるのではない何ものも知られはしないということが言えるようになる。それは、経験が成立するためには、内容＝精神が自体的にあること、即ち実体であり、意識の対象であることによっているからである。この場合の実体は、精神が自体的にそうであるところに向かう生成であり、このような自己内還帰、及び反省を経た上で生起する生成をして、精神は自体的に真実態において精神たりうる。それは、再認する運動であり、精神の自体を対自へ、実体を主体へ、意識の対象を自己意識の対象へと変換することであり、それは同時に対象であることを止揚されたもの、つまり、概念へと変換することを意味する。こうして、自己の出発点への還帰が成され、円環が成就する。

++ 意識が自分についてつむところの経験が意識の全体系以下のものを内含することは決してありえないのは、この経験の概念がしからしむることである。言い換えると、この経験は精神の真理の全領域を含むが、しかし含むのは、この真理の諸契機が抽象的な純粋な諸契機であるのではないという意識に固有の限定において現れてくるかぎりにおいてのことである。(緒論－〔三 叙述の方法〕－〔三 経験〕原書 No. 74 ～75)

精神の全体が直観され、単一な自己意識に対立したものとして現れてくる。ここから、精神は、自体的な完成態である世界精神として完成する以前は、自己意識的な精神としても完成を遂げることはできない、と結論が下されるのである。

〔δ 現実の歴史〕

16／精神の形式の現出の過程

シェーマ 5

- | |
|---|
| <p>i. 教団：絶対精神の基底・実体
～粗野な意識・野蛮な生活・内容との過酷な格闘
↓
～希望の放棄・自己意識への還帰・抽象的な世界への現実の自己による精神の付与</p> <p>ii. 存在と思考との統一・そしてその言明〔デカルト〕
～抽象的な実在と自己との無媒介な統一の抽象的な言明</p> <p>iii. 延長と存在との統一・東方の実体の召喚〔スピノザ〕
～精神の没自己的な実体性からの退去・個性性の主張</p> <p>iv. 絶対自由における「そこ」の存在の自分の意志としての把握〔ルソー・カント〕</p> <p>v. 思考と時との統一としての実在〔フィヒテ〕
～実在をしての「自我は自我である」という宣言・自己内還帰の運動
自我の自己同一である絶対的な否定態・絶対的な区別</p> <p>vi. 自己の自分自身との完全な無媒介な統一〔シェリング〕
～内容に空ろな直観をする主体・実体、それは絶対的な統一として思考される限りにおいて絶対者として妥当する。</p> |
|---|

17／精神の運動の真実態

前段において、精神が現実の歴史として現出する過程が押さえられた訳だが、それらは、いわば、精神の個別的な諸契機であり、それらとは異なり、「我々」に示された精神は自己の運動であり、それは次のようなものであるとヘーゲルは記す。

++ 即ちこのさいの自己は自分自身を外化し自分を実体のうちへと沈めこめはするが、それでいて主体とし実体から出て自分のうちへと還帰してしまっており、こうして実体を対象とし内容とすると同時に、この自己は対象性と内容とが区別を止揚しもするものである。(中略) 精神の力というものは、むしろ自分を外化することにおいても自己同一を保つことに存するのであり、また即且つ対自的に存在するものとして、即自存在と同じく対自存在をもただ契機にすぎぬものとして定立することに存するのである(中略) 知ることとは却ってむしろ区別せられたものがそれ自身において運動して、自分の統一のうちへと帰っていくのをただ観望するにすぎぬところの、この一見すると無為とも見えることに存するのである。(絶対的な知ること 原書 No. 561)

かくして精神は、現実の歴史を積み重ね、知ることにおいて、自己の全行程を完結させた訳である。

〔三 体系の概観〕

〔α 論理学或いは思弁哲学〕

18／『精神の現象学』の位置

精神の行程の完結により、精神は自己の定在を得るための純粋な境地である概念を獲得してしまった。ここにおいて精神は学となる。そして、諸契機は限定された諸概念として、又、有機的で自身のうちに根拠をもった運動として表現される。

精神の現象学では、あらゆる契機が知ることと真理との区別もっており、この区別をして自らを止揚する運動となしている。ところが、学においては契機は概念の形式を具えており、そこでは真理の対象的な形式と、知るところの自己という形式が、無媒介の統一において結合している。

〔β 絶対的な知ることの外化 その一 自然〕

19／概念の放棄という必然性

しかし、達成された純粋な概念という形式を、学は放棄しなければならない。何故なら、自分自身との無媒介の同一に到った精神の自分について知ることの自由は、始めの感覚的な意識であり、無媒介のものについての確信であるからである。

20／自然への外化

精神の絶対的な知ることにおいては、知は自分のみならず、自分にとって否定的なものも知ることである。それは同時に自分の限界をも知ることであり、そこに自分を犠牲にすること外化が成立する。この犠牲という外化においては、

- ・自分の純粋な自己を自分のそとに時として外化する
- ・自分の存在を自分のそとに空間として外化する

という二通りの生成が生ずる。この後者の方が自然であり、精神の生ける無媒介の生成であることになる。

〔γ 絶対的な知ることの外化 その二 歴史〕

21／概念としての歴史への外化・絶対精神の座

そして、精神の生成のいま一つの側面が歴史である訳だが、それは知りつつ、自分を媒介する生成であるとして、ヘーゲルは次のように述べている。

++ このさいの「外化」は外化であると同時に外化すること自身を外化することでもある。否定的なものがその否定的なもの自身の否定的なものなのである。さてこの生成が表現しているのは、もろもろの精神間のひとつの緩やかな運動であり継起である。(中略) そうして精神が完成するのは、何が精神であるかを、精神が自分の実体を完全に知ること存するのであるから、この知ことは精神が「自分のうちへ行くこと」であり、そうしてこの「自分のうちへ行くこと」においては精神は自分の「そこ」の存在を見捨てて自分のもっていた形態を内面化し憶のうちへ委ねるのである。(Ibid. 原書 No. 563)

こうして、もろもろの「精神の国」が「そこ」の存在のうちで形成され、ひとつの継起を形づくる。そして、ひとつの精神が他の精神にとってかわり、その変転により、各々の精神が先立つ精神から「世界の国」を受け継いできた。

その継起の目標は、ヘーゲルの言によれば「〔精神の〕深底が顕わにという啓示」であり、そこには、これまでに踏破された全行程の「思い出」が畳み込まれている。ここに、ヘーゲルは、「そこ」の存在という側面から見れば歴史であり、概念的に把握された組織という点から見るなら現象している知ることの学であり、その総合として、概念的に把握された歴史を置いている。それは絶対精神の思い出、「頭蓋の場」と呼ばれている。

この項 了